2017年3月31日発行

ニュースレター No.41
News Letter
INSTITUTE FOR THE STUDY OF CHRISTIANITY AND CULTURE

聖書と文化

学院長　小河 陽

文化を示す欧語はいずれもラテン語colo＞cultura（栽培・耕作）に由来する。聖書で人類史初期における「耕作の営み」の記事で想起されるのは「額に汗してパンを得るアダム」である。神に代わって地を管理し（創1:28）、収穫を得るために耕作する（同3:19）こと、それはそのための知恵や知識、道具や技術の洗練を人類に促し、有形・無形の成果を築き上げてきた。文化とはその総体と言えなくもない。創世記は世界の始まりの科学的説明ではなく、聖書を生み出した人々が労苦を伴う人生や世界にどのように意味づけや価値を見出したか、それを物語るものであり、そこに文化理解の原型が見られるように私には思われる。

他方で、「カインとアベル」の物語で、神はカインの献げ物を退ける。理由は語られないから、想像するほかない。神の代理として地を管理し（創2:15）、命を維持継承させてゆく農業の営みが、嫉妬や呪いという、命への負の価値を生じさせる。命を維持するための働きが、富と栄誉の専有や権力・支配への指向という、本来の趣旨を逸脱した営みに転じ得る。すると、これは人間にとって文化が負の側面を持ち得ることを暗に示す物語である。土から造られ土に返る人間が地を支配するということ、それは、文化の主体である人間はそもそもの起源から文化と緊張関係にあるという意識の言語化ではないだろうか。

聖書から読み取れる人間と文化の肯定と否定の緊張関係は、H・リチャード・ニーバーがキリスト教徒と文化や社会との関わり方の1類型として示した「文化の変革者キリスト」に通じるかもしれない。文化を信仰と異質なものとして全否定するのでも、両者を同一視して無批判に受容するのでもなく、あるいはカトリック信仰のように文化の上に位置づけられる信仰というのでもなく、文化の只中で緊張関係を保ちながらその都度否定か肯定かが選び取られる。その軌跡こそがキリスト教文化史と呼べるものを紡いでゆくように私には思われる。

ネイサン・ブラウン翻訳の日本最初の新約聖書（全訳）『志無也久世無志與』1巻本・扉（英・和）1879年刊（関東学院大学図書館所蔵）
ギリシャ語各種写本を参照し、本文の意味を忠実に訳出した。しかも一般の人々に読まれる平易な日本語に訳出した。

「ヘボン研究」研究内容要約と今後の課題

国際文化学部非常勤講師・客員研究員　権田 益美

一八五八（安政五）年、T．ハリスにより日米修好通商条約が締結されると、アメリカでは教会各派から日本へ宣教師を派遣する動きが出てきた。ヘボン（James Curtis Hepburn）と、その妻クララ（Clara Mary Hepburn）は、一八五九（安政六）年四月にニューヨークより日本宣教をめざし出発、十月に神奈川に到着した。禁教下の日本においてヘボンは、日本人との信頼関係を築くために、無料奉仕で医療活動を続けた。英語教育にも力を入れた。

一八六二（文久二）年九月には、生麦村（現在の横浜市鶴見区）にて、生麦事件がおこる。東海道を馬に乗って散策中のイギリス商人四人が、薩摩藩島津久光の行列と出会い、斬りつけられるという事件である。その事件の際、負傷したイギリス人商人の治療を本覚寺（現在の横浜市神奈川区）のアメリカ領事館にて行ったのは、ヘボンである。ヘボンは、当時アメリカ公使館付き医師という肩書を持っていた。事件の対策を話し合うため、横浜居留地民は会合を持った。その会合は、横浜居留地民が自治について問題意識を持つきっかけとなった。同年十二月横浜居留地に転居したヘボンは、居留地三十九番の自宅に施療所をひらき、医療活動を続けた。英語教育に関しては、一八六三（文久三）年、クララを中心とした私塾を開校、これがヘボン塾の始まりとなる。

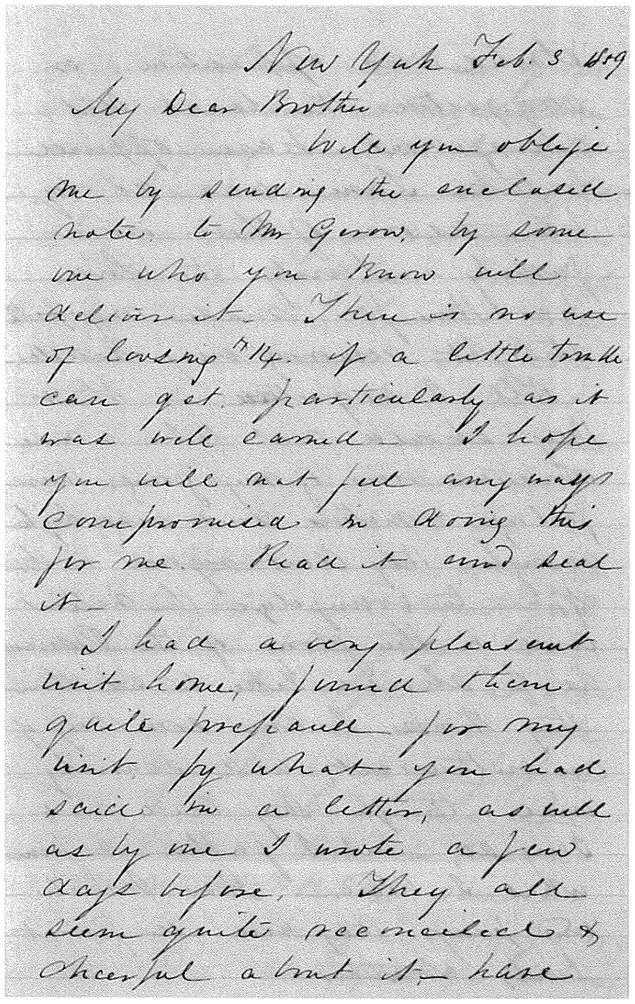
一八六四（元治元）年には、第二回地所規則（横浜居留地覚書）が外国奉行柴田剛中、神奈川奉行白石島岡とアメリカ、オランダ、イギリス、フランス四ヵ国公使との間で締結された。その中には、居留地の拡張、自治、遊歩新道開設等の条項が盛り込まれた。それらの条項を受け、横浜居留地にて新参事会が発足した。その顔ぶれを見ると商社経営者が中心で、メンバーも商人が大半を占めた。新聞発行業務を担当したジャーナリストも、三名ほど名を連ねている。宣教師では、唯一ヘボンのみが参加している。神奈川在住時と横浜居留地での在日日数が他の居留地民に比べ圧倒的に長く、その間多くの実績を残してきたヘボンということもあって、相談役という立場から参事会の役員に推挙されたと考えられる。

妻クララとともに（横浜開港資料館所蔵）
ジェームス・カーティス・ヘボン James Curtis Hepburn（1815～1911 年）
ペンシルベニア州ミルトン出身の米国長老派教会の医療伝道宣教師、医師。類稀なる語学力により日本語を習得し、眼病治療や外科手術で名声を博す。英語教育のみならず横浜の近代医学の歴史はヘボン施療所によって始まったといわれる。“ヘボン”は彼自身が日本人向けに使った名前で、“平文”という表記を使用した。

ヘボンの業績の代表的なものの一つに『和英語林集成』（A Japanese and English Dictionary with an English and Japanese Index）の編纂があげられる。和英辞典の準備は、来日当時からのヘボンにより進められた。主に医療活動を通じて出会う患者との会話の中から、ヘボンは辞書に必要と思われる日本語をその都度、丁寧に書きとめ収集した。各単語の使用例を研究してきた。『和英語林集成』に収められた語数は第一版の和英の部は、二万七百七十二語、一八六六（慶応二）年、印刷に訪れた上海でまとめた英和の部は一万三十語も加えられた。『和英語林集成』は一八六七（慶応三）年五月中旬に千部から二千部限定で横浜居留地にて販売された。その評判は良く、日本語を学ぶ外国人だけでなく、英語を学ぶ日本人にも愛用された。『和英語林集成』は、ヘボン自らが将来めざす聖書翻訳や、今後新たに来日する宣教師の日本語習得のための貴重な存在となった。一八七一（明治四）年にヘボンは、『和英語林集成』（A Japanese-English and English-Japanese dictionary）第二版印刷のため上海を訪問、翌一八七二（明治五）年五月には、三千部が横浜にて販売された。

一八七四（明治七）年三月、聖書翻訳委員会社中が結成される。各教派の宣教師、日本人の助手との連携が重要で、翻訳作業は一八八〇（明治十三）年まで続く。一八七六（明治九）春になると、ヘボンは、横浜居留地三十九番から、妻クララの健康を気づかい山手へと移り住んだ。旧約聖書の翻訳については、一八七八（明治十一）年、ヘボンも委員会に参加、一八八七（明治二十）年に完訳となる。聖書の翻訳及び出版はヘボンの日本での集大成といえる。聖書翻訳でも有効活用された辞典もより内容を充実させ版を重ねる。『改訂増補和英英和語林集成』（A Japanese-English and English-Japanese dictionary）第三版では、丸善に版権を移し、一八八六（明治十九）年に出版となる。特に、この版の和英の部の大幅な増加は興味深い。

今後の私の研究課題であるが、一八七三（明治六）年二月のキリスト教禁制の高札撤廃以降のヘボンの業績について研究を進めていきたいと考えている。私は、二〇一六年夏、アメリカのニュージャージー州にあるプリンストン神学校（Princeton Theological Seminary）の図書館を訪問した。滞在は短い期間ではあるが、今回で三回目となる。今回も、開架書庫に並ぶ書籍を閲覧、貴重書も特別に拝見させていただいた。ヘボン関係の書籍や、一八〇〇年代後半のプリンストン神学校の年間カリキュラム等を拝見し、今後の論文作成の糧となる多くの文献を収集することができた。今後の調査においては、滞在の規定時間内で、どれだけ有効に史料・資料を収集できるかが引き続き課題となる。日本での予備調査を綿密に行う事が重要である。プリンストン神学校の専門図書館司書の方からは、最近では図書館蔵書のデーターベース化がより進み、日本からでも入手できる史料・資料が増えているのでこの点をうまく活用しながら研究を続けていくようご指導いただいた。ヘボンの粘り強さは、人生の手本となる。今後も努力を続けていきたい。


New York Feb. 3 1859
My Dear Brother
Will you oblige me by sending the enclosed note to Mr Grow, by some one who you know will deliver it. There is no use of losing 7/14. if a little trouble can get it, particularly as it was well earned. I hope you will not feel any way compromised in doing this for me. Read it and seal it.
I had a very pleasant visit home, found them quite prepared for my visit by what you had said in a letter, as well as by me I wrote a few days before. They all seem quite reconciled & cheerful about it. have

ヘボンが弟スレーターに宛てた書簡（1859年2月3日付 / 高谷道男氏寄贈　横浜開港資料館蔵）
日本への派遣に家族の理解が得られたことに安心しつつも、息子サムエルを知人に預け日本へ旅立つことに「胸もはりさけんばかりの悲しみを感じている」と記している。

三位一体論成立史に見る教会と社会との関係

学院宗教主事・国際文化学部講師・研究員　安井 聖

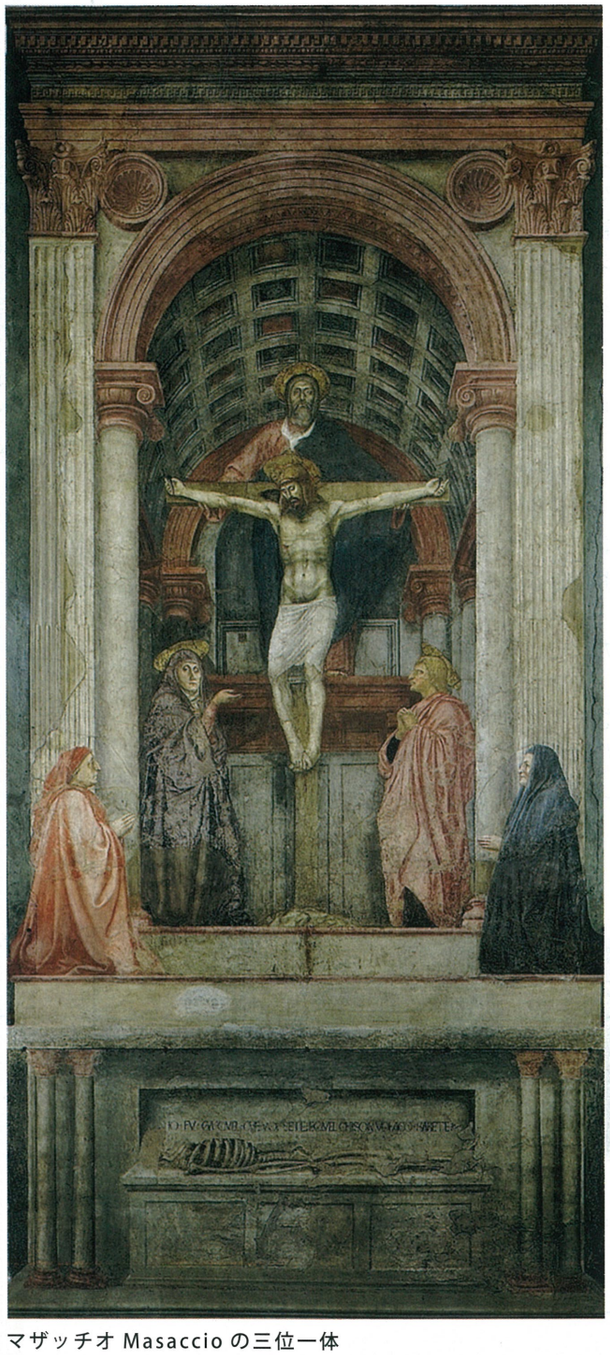
キリスト教会が誕生して最初の数百年間の歴史（1～4世紀）は、極めてドラマチックに展開した。ユダヤ教の中から誕生したキリスト教会は、そのユダヤ教による迫害を逃れて国外へと、すなわちユダヤを含む地中海世界全域を支配していたローマ帝国の諸地域へと広がった。ローマはユダヤ教のような古来より存在する諸宗教を公認していたが、当時新興宗教と見なされたキリスト教会を公認せず、約300年にもわたって迫害し続けた。ところが313年にコンスタンティヌス帝はミラノの勅令を発布し、キリスト教会の信仰を公認した。そして4世紀末には、キリスト教会は事実上ローマ帝国の国教となったのである。

キリスト教会を取り巻く環境が大きく変動していく中で、その内部では「自分たちが信じている神をどのような言葉で言い表すか」ということを巡って議論を重ね続けていた。つまり教会固有の神への信仰を、ローマという異文化世界の人々に対してどのように言い表せば通じるのか、理解してもらえるのか、という課題に取り組まざるを得なかったのである。

そのような中でユスティノス（100頃～165頃）は、ローマの思想世界で市民権を得ていた中期プラトン主義のロゴス論に基づく神概念と、キリスト教会の神概念の類似点に注目して、ロゴス・キリスト論を展開した。ローマの人々がすでに受け入れている神概念との類似を指摘することによって、ユスティノスはキリスト教会の神概念への誤解や偏見を取り除こうと努力したのである。そこには自分たちの思想を理解してもらうために、教会が対話の努力を重ねている姿が見える。

けれどもそんな努力の結果、教会がローマ社会に受け入れられたわけではなかった。むしろ教会はその後、ロゴス・キリスト論と聖書の神概念との違いに気づき、これを修正する議論を重ねた。

4世紀になり、ミラノの勅令によってキリスト教会の社会的立場は一変した。これと時をあわせるかのように、古代教会史上最大の神概念を巡る論争が勃発した。それがアレイオス派との論争であった。アタナシオス（296頃～373）は、子なるキリストを被造物に過ぎないとするアレイオス派の理解を厳しく批判した。ところがローマ皇帝たちは概してアレイオス派を支持していた。そちらの方がローマ人たちに理解しやすかったのかもしれない。その結果アタナシオスは皇帝による迫害を経験せざるを得なかったが、これに屈せずにキリストがまことの神であられると主張し続けた。こうして遂に教会は父、子、聖霊を一体にしてまことの神とする三位一体の教理を確立し、ローマ社会もこれを受け入れていったのである。



マザッチオ Masaccio の三位一体

初期ルネサンス・フィレンツェ派マザッチオ最大の代表作とされ、キリスト教の最も重要な根本的教義を示す「三位一体」を主題とし、完璧な遠近技法によって描かれた。フィレンツェのサンタ・マリア・ノヴェッラ聖堂に安置されている。

『スコットランド、一八〇三年：ワーズワス兄妹とコールリッジの旅』

人文科学研究所助成出版、春風社、2017年1月25日刊行

所員・著者　安藤 潔

英国のロマン派詩人ワーズワスと妹ドロシーそして当時の朋友コールリッジは 1803 年の秋にスコットランドへ出かけている。本書ではこの旅を多角的に取り上げた。コールリッジにとっては生涯唯一のスコットランド旅行だったが病気がちで、結局途中で一人旅となり遥かインヴァネスに至り帰路につくが、この旅は彼にとっても独自の経験となる。ワーズワス兄妹はコールリッジと別れた後もハイランドをめぐり、スターリングからエディンバラに入り、ローランド地方でサー・ウォルター・スコットとの出会いを果たす。

著者は三人の足跡を追って現地に赴き、撮影した写真を本文中に配置し、行きそびれた場所もインターネット等で確認し地図も加えまとめた。自著の概要は他でも公表したので、ここでは以前にも公に記した、私のスコットランドでの宗教的体験について述べたい。信者でもなく宗教を語る立場にもないが、キリスト教主義の大学に勤める者として、現地で今も生きる信仰に触れた感想を述べるくらいは許されるだろう。

エディンバラでは私も有名なセント・ジャイルズ教会を意識したが、兄妹が教会の中に入った記録はない。宗旨が異なるためか、彼らはこの先安息日に教会に向かう多くの人々とすれ違っても逆方向に進み旅を続け、地区の礼拝に参加した様子はない。兄妹はラスウェイドでスコットと出会った日の夕方に、聖杯探求伝説の謂れがあるロスリン・チャペルの中を見学しているが、これも祈りよりもその精緻な造りゆえといえよう。後に著作上で宗教や政治も語るワーズワスだが、この旅には宗教的なことはあまり見られない。

本書では述べていないが、私のスコットランドの旅では、スコットの邸宅に併設のチャペルで祈る人々を見たことが最も宗教的体験だった。アボッツフォードはスコットが成功した後の 1811 年に入手したエステイトだから、1803 年の旅行時には言及もない。このチャペルを訪れ、ここで祈る人々の素朴で敬虔な表情を見て私は言葉を失った。そして案内してくれた現地関係者のテストめいた謎かけに答える気をなくした。

サー・ウォルター・スコットの邸宅、アボッツフォード。左端が 1855年増築のチャペル。スコットの死後オックスフォード・ムーヴメントを経、孫娘夫婦がカトリック式で建造。

表紙カバーに用いたオウ湖。鉄道駅「ロッホ、オウ」の出口より。

〒236-8501横浜市金沢区六浦東1-50-1
TEL：045－786－7873（研究所直通・月～金9：30～17：00）
FAX：045－786－7806（研究所直通・24時間受け付）

発行者：村椿 真理